

# 新潟県・畑野町・長谷寺・木造女神坐像について

長坂 一郎

NAGASAKA Ichiro

## 1. はじめに

新潟県佐渡郡畑野町・長谷寺は真言宗豊山派の古刹で現在までに三軀の観音立像が国指定重要文化財、さらに木造十一面観音立像一軀、木造不動明王立像一軀および衿羯羅童子像一軀が県指定文化財に指定されているが、この度さらに興味深い遺品を見出したのでその紹介と若干の考察を試みたい。

### I 像の概要

まず像の概要を記したい。像高は現状で54.0センチメートルの坐する女神像である(註1)(図1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11)。頭部は髻を丸く大きく結び上げ、残りを肩に垂らす。正面と左右からなる大きな花卉形三山冠を着ける。地髪は平彫りとし髪際正面で疎らな房を4個作る。左右の鬢に毛房一条を垂らす。彫眼とし三道を彫出する。服制は袖の大きな衣を右衽に着け、その上に括り袖の襦袢衣を重ね(註2)、裳をつける。体勢は正面を向き左手は上腕を体側につけて垂下し屈臂して前腕を膝上に伸ばす。右手は上腕を体側につけて垂下し屈臂して前腕を前に立てる。現状では両手先とも欠失する。左足は折りたたんで右足大腿の上に載せ右足は垂下する半跏形をとって坐す。裳裾は左足裏の半ばを覆い、現状右足の垂下部は欠失する。

品質・構造は榿材、一木割矧ぎ造り、彩色像。頭軀の軀幹部は木心を正面前方遠くにはずした榿の堅木一材か

ら彫出し、後頭部から前後に割り放って内削りを施し、榿材製の背板を当てる。この軀幹部材に榿の横木一材製の両脚部を矧ぎ付けるが、その矧ぎ面は腹下にくい込ませて(搔き込んで)はめ込まれる(軀幹部材の腹下側は面取りをする)。この脚部に右足膝以下を別材製で矧ぎ付ける。現状では丸ホゾのホゾ穴(縦4.5cm×横3.5cm×深さ3cm)が残る。両鬢髪部各別材矧ぎ付け。左手前膊部一材(榿)製矧ぎ付け。手首先別材製。右手は前膊部一材(榿)製矧ぎ付け。その外側、袂部外側一材(榿)製矧ぎ付け。手首先別材製。現状、丸ホゾ(径1.6cm×長1.9cm)が残る。

両手首先欠失。右膝以下欠失。左鬢髪部欠失。背板後頭部(最大、縦5.5cm×横8.5cm)欠損。また体背面左側、軀幹部材と背板の接合部で、背板側に地付きから最大、縦12cm×横4cmの三角形に欠損(鼠害か)、軀幹部材側に地付きから縦10cm×横5cmの三角形に欠損(剥離)。彩色は後補。

欠失部・欠損部があり、面相部はやつれ風雨に曝された時期のあったことを想像させ、また体全面に虫喰の跡も残り保存状態は良好とはいえないが、全体の形態は当初の姿を十分に伺うことのできる作品であると思われる。



图 1



図 3



図 2



图 5



图 4



図 13



図 6



图 7



図 9



図 8



图 11



图 10





図 12



図 14



図 15

## Ⅱ 作風・制作年代

ここではまず本像の造形の特徴を考えて、その制作年代および神像の系譜の中での位置付けを検討してみたい。

本像の正面観は大きい頭部が体部にめり込むようにやや猪首ぎみとなり、肩がなで肩で胸を寛げず脇を締めることから上半身は細身ですらりとまとめられた印象を示すが、これに比すると両脚部の張りは大きくまた左膝頭も丸くのびやかに作る。欠失した右膝の矧ぎ面も大きく、左膝と同様と思われる。全体として両脚部・下半身に量感を持たせてかっしりとした安定観を与えている。一方、側面観ではうって変わって上半身は奥行きの深さ、豊かな量感をみせる。姿勢は顔を少し前に出しやや猫背気味とする。面の奥行きは面長の1.5倍ほどで深く、胸も厚く腹部はさらに丸く膨らませる。胸と腹の繋がりには穏やかである。また半跏形とする左足首は深くしっかりと組まれている(図12)。これら体躯の表現の特徴を総じてみると量感表現とそれによる安定感ということができると思われ、その作風は平安時代後期、穏やかな肉付けなどと表現されるいわゆる「和様」表現とは異なるものとすることができ、すなわち制作はそれ以前、平安時代前期に

廻るものと思われる。

さらに構造面からも同様の指摘ができるように思われる。前述のように本像は頭軀の軀幹部は櫃の一材から彫出し前後に割り放って内削りを施しているがその内削りは小さく(図13)、内削りを小さくするものは古作に見られる技法といわれる(註3)。

面相部はやや下膨れで丸く頬を張る。額を広く取り目鼻立ちを下方に配するが、それは設定年齢を若い女性としたためかと思われる。眉は目頭から緩やかに立ち上がり、弧を描かずに水平に長く伸びこめかみに届く。上瞼は眼球の膨らみをあらわし目は切れ長で一文字にやや吊り上げて眉同様こめかみに達する。表面のやつれで一見明瞭ではないが仔細に見れば目の見開きはかなりしっかりしていたようであり、下瞼側を目じりまで彫ることとともに、初期の神像らしい鋭い目つきであったと想像される。(また眉尻、目尻を長くのばすことは仏像に当てはめてみると、例えば旧若王寺・奈良国立博物館蔵・薬師如来坐像のような九世紀の古作に見られるようである)目・眉に比して鼻・口は小さく作るが、鼻翼の食い込み線は深く、人中も上唇に深く切れ込む。上唇をやや突き出し口元は一文字にきつく結びその結果両端を僅かに持ち上げているようである。以上のように面貌はかなり意思的、厳しい表情を見せるとしてよくこの観点からも例えば京都・松尾大社・女神坐像のような初期神像に通ずるものを想像させる。

一方、本像の衣の表現は東寺・八幡三神像や薬師寺・八幡三神像、前述の京都・松尾大社・三神像などの著名な初期神像に比べると衣文をあまり刻まず、後代の神像に近いものを見せるが、例えばやはり早い時期の神像と思われる福井・大虫神社・塩土尊像は衣文線を刻まない簡素な表現としており、衣文の表現法とすればその中間に位置するものとされようか。先に触れた面貌表現の観察を踏まえて考えてみると初期神像のうち京都・松尾三神像の次代に位置するくらいのものであると考えることができるのではなかろうか。

このように衣文表現は数少ないものの、右袖に見える2本のそれは鎬の立った稜線を見せる古様なものであり(図14)、また左足に刻まれる2本のそれは足首近くで紐状となるがこれも鎬立つ衣文線の名残なのかもしれない(図15)。さらに左足に掛かる裾は外側にややめくれるような粘塑的な柔らかい表現も見せるがそれも古様である。

衣服の表現はこれら衣文形式を別にしても全体におおらかに、ゆったりと刻まれており、体軀全体の表現と合わせても本像の作風とすることができよう。これらから考えてみると本像は九世紀に繋がる古様を見せるものの、上半身の正面観がややおとなしく、足の組み方も深いもののやや力不足を感じ、すなわち造形の緊密性、緊迫感が減じその分おおらかな方向に向かっているようにも思われ、とすると制作時期は9世紀末10世紀始め頃としてよいのではなかろうか。ともあれ遺品のさほど多くはない平安時代前期の神像の佳品作例を提示できたものと思う。

### Ⅲ 伝来・名称

長谷寺については『佐渡名勝志』(註4)巻三では「大和小池坊末寺 元禄改正記曰、越後国吉祥寺末寺ニテ開基弘仁年中ト云伝レトモ、書証紛失ト云々」とするのみであるが、『佐渡国誌』(註5)宗教・仏教では数書を引用する。まず「明細帳」では「本山長谷寺末 天平年中行基ノ開基ニテ養禪寺ト號ス大同年中弘法大師来リテ豊山長谷寺ト改稱ノ由ヲ伝フ往古ハ寺領三百貫文坊舎百二十字アリシニ天正戦乱後寺領ヲ没セラレ伽藍破壊シタルヲ慶長以後再興シタリ云々」とし、「佐渡志」では「大和小池坊之末寺 雑太郡長谷村ニアリ山ヲ豊山ト名ツケテ大和ノ泊瀬ノ趣ヲ寫ストイヘリ其寺ノ傳フル所ハ大同年戊子ニ初メテ建ツトイヘリ定カナラス観音ノ靈像アリテ土人深く尊フナリ其餘古キ佛像多シ」とあり、「子山佐渡志」には「此寺亦蓮華峰寺ト共ニ高野古義派ノ一本寺ナリシカ天正年間上杉景勝ノ国タリシ程ニ越後国吉祥寺屬下トナル」とあり、「寺社帳」には「開基弘仁二卯年 中興長鏡正長元申六月廿五日観音堂再建」とあり、さらに「寺記歴代」には「中興一世長鏡 文龜三年越後国西津吉祥寺法流相統 廿一世快弁 元禄十一寅正月大和小池坊末ニ改」とある。これらからすると長谷寺は行基伝説を持つものの開基は平安時代初期とされ真言宗であったとされるが、同派ともされる蓮華峰寺が小比叡山と号するように天台宗であったことから考えると(「子山佐渡志」では蓮華峰寺を真言宗とするが同書を引く『佐渡国誌』は別項に天台宗とする)真言、天台両宗が入っていた可能性がある。古くは法相宗が入りついで天台宗となりさらに真言宗が入るといった経過は多くの古代寺院に見られるものである。さらに戦国期に上杉景勝の佐渡

征服で真言宗の越後・吉祥寺の末になるが、上杉の政策でこの地の多くの寺が宗旨替えとなったことからすると案外その時のことかも知れない。さらに元禄年間に大和・長谷寺の末となったものである。『佐渡国誌』ではついで同寺什宝として、「一 十一面観音三軀 一 不動明王 一 五大尊 一 五大明王・奥院 以上弘法大師作 一 薬師画像 智証大師筆 一 五仏 慈覚大師作 一 十六善神 春日作 一 宝剣曼荼羅」と記すが、これらは本堂・奥院の什宝のみのようである。

本像は現在、長谷寺・観音堂に安置されているが、もと同寺境内にあった白山社から移坐されたものといわれる(註6)。さらに先の『佐渡名勝志』長谷寺の項に寛永十年(1633)の文書をあげるがそこに「一 境内二十二町四反一畝歩 長谷寺 但寺家四ヶ寺並観音堂・白山権現社地共二」とあり同寺に白山権現社があったことをいうので、その事は確かめられよう。とすれば白山権現が女神であることを踏まえれば本像はまさに白山女神像であると思われ、現状ではおそらく12世紀の福井・朝日町・八坂神社・十一面観音女神坐像、京都・宇治市・白山神社・伊邪那美尊像(女神坐像)などが最古の白山神像と考えられるが、その遺品の上限が遡ることになる。またそもそも名称の明らかな神像の早い例の一つとされるのではなからうか。

白山神の初出と思われるのは『三代実録』元慶八年(884)三月二十六日条の僧正宗叡の卒伝に、

随円珍和尚於園城寺受兩部大法、于時叡山主神假口於人、告曰、汝之苦行、吾將擁護、遠行則雙鳥相隨、暗夜則行火相照、以此可、為徵驗、厥後宗叡到越前国白山、雙鳥飛隨在於先後、夜中有火、自然照路、見者奇之

とあり、円珍の弟子であった宗叡が比叡主神の加護によって白山に登ったことをいう。天台教団を鎮護するとされた比叡主神すなわち山王権現と白山権現の接触、後の山王二十一社の中核に客人宮として白山権現が入る前段階を示す記事とされるが(註7)、白山が苦行に適した地、すなわち神の居ます地として知られていたのであろう。この後、宗叡は東寺に転じ入唐することになるが白山に入って苦行した時期は叡山で具足戒を受けた天長八年(831)から入唐の貞観四年(862)までの間ということになる。また『日本高僧伝要文抄』尊意贈僧正伝では叡山の尊意の幼年時の師・度賀尾寺賢一は元慶二年(878)

にやはり白山に向かったといい、9世紀半ば以降には天台系の苦行僧に白山神は知られていたとされるであろう。その間『文徳実録』仁寿三年(853)十月己卯(廿二)に「白山比咩神従三位」、『三代実録』貞観元年(859)正月廿七日甲申に「奉授加賀国白山比女神正三位」と神階が与えられているので中央にも知られるようになっていた。その後長寛元年(1163)成立とされる『白山記』(註8)に「ノウノ白山 越後」とあり、日本海側での白山信仰の広がりを伝えるが、一方同書には「奥州秀衡五尺金銅像奉治鑄之」ともあり12世紀には東北地方にも広がりをみせていたようである。

佐渡における白山信仰に関しては古い記録は無いものの、永享八年(1436)の世阿弥の『金鳥書』(註9)に「この佐渡の国や北山、毎月毎日の影向も、今に絶えせば、国土豊かに民厚き、雲の白山も伊弉册も、治まる佐渡の海とかや。」と白山権現が北山(金北山)に影向するといい、また同じく室町時代の成立とされる『義経記』巻七には越後・直江津から船出して寺泊に向かうにあたって佐渡からの逆風を「白山の岡より風吹き下ろし」というなど、文学作品のなかではあるが白山権現の佐渡進出が伺われる。特に後者は越後・寺泊の対岸が古代の佐渡の公の津で『延喜式』にのる佐渡三駅の最初の駅である松ヶ崎(註10)でありその要地に「白山の岡」すなわち白山社を祀っていたことを想像させ、白山信仰が海上交通の要地に広がっていったという説(註11)を補強するものとも思われる。さらに注意を引くことは松ヶ崎から内陸に向かう松ヶ崎街道の途中に長谷寺が位置していることであり、実際流刑となった世阿弥は先の『金鳥書』で松ヶ崎の隣の多田(大田の浦)に上陸し配所に向かう途中で長谷寺に参拝している。

残念ながら佐渡における白山信仰の明確な資料は無くこのように中世後期の文学作品、紀行文にしかたどることはできないが、それ以前の土壌が存在したゆえにそれらに取り上げられたこともまた事実と思われる。当地には9世紀に遡る仏像の遺品、重要文化財の国分寺・薬師如来坐像が伝存しており早くから中央との繋がりは認められ、したがって白山神が9世紀から天台系修行僧により信仰されていたのであれば佐渡にも早い時期に進出できたと考えてもよいのではなからうか。ここでは一応、長谷寺・女神像が白山女神像である可能性は年代的にも、地域的に見ても妥当としてよいと考える。

#### IV 形態の特徴について① 一服制一

ついで本像の神像としての形態の特徴を見てみる。まず服制について。

先に見たように、本像は頭部に冠を戴き上半身に衣、襦袢を着け下半身に裳を着けるという神像一般に通ずる俗体女性の服制とする。

まずわが国の服制には「大祀大嘗元日則服之」の礼服と「朝廷公事則服之」の朝服とさらに無位の者が公務に服する時の制服があった（註12）。そのうち女性の場合、礼服は例えば内親王は「礼服宝髻。深紫衣。蘇方深紫紕帯。浅緑褶。蘇方深紫緑纈裙。錦襪。緑舄」とあって、以下女王、内命婦と身分、位階により多少差はあるもののおおよそ宝髻、衣、紕帯、褶、裙、襪、舄を着用したもので、一方朝服は「一品以下五位以上。去宝髻及褶舄。以外並同礼服。六位以下初位以上。並着義髻。衣色准男夫。深紫緑紕帯。緑纈纈裙。白襪。烏皮履。四孟則服之。」と礼服から宝髻、褶、舄を除いて、衣、紕帯、裙、襪、履をつけたものという。さらにこのうち礼服の衣は儀礼用であるので袖口が広い大袖となっており、朝服の衣は執務を目的としていたので筒袖であったのではないかとされ、関根真隆氏によれば（註13）具体的には礼服の例を示すものとして薬師寺・吉祥天画像、朝服の例として法隆寺・五重塔・塔本塑像婦人侍者像・西面10号像および同31号像をあげられている。そこで長谷寺・女神像を当てはめると長谷寺像の衣は袖口が大きいので礼服に近いといえるであろう。ところが頭部と足もとは異なるようである。

頭部については先のように衣服令では女性礼服の頭飾は宝髻とあった。この宝髻については『令義解』では「謂。以金玉髻髻緒。故云宝髻也。」という。奈良時代の服制が唐朝の服飾の採用であったことを踏まえればこれはすでに原田淑人氏が『唐代の服飾』において「金玉の鈿釵步搖等を以って高髻を飾りたらんものならん」とされる宝髻と同じものと考えてよいであろう（註14）。すなわち宝髻とは鈿（金を以って花形を造り髪を蔽って飾る）・金釵十二行（一人で金のカンザシを12本つける）・步搖（黄金珠玉を貫き、カンザシから垂らして歩くと揺らぐ飾り）などの飾りを結び上げた髻そのものに飾り付ける、あるいは髻に飾りを挿す形式の頭飾であり、髻の前・左右の地髪部に飾り物（板）を被せる（立て付ける）長谷寺像の冠とは異なるものである。長谷寺像の頭飾は

本来の俗人の服制には則っていないことになる。とすればそれは何によるものなのか。そこで思い当たることは長谷寺像が三道を刻んでいることである。三道は仏像の形式で、初期神像には東寺・八幡三神像や松尾大社・三神像のうちの女神坐像、大分・奈多宮・八幡三神像、熊野速玉大社・夫須美大神坐像等に見られ、同じく初期神像にみられる結跏趺坐形とともに神像の仏像形式採用の例としてあげられるものである。したがって長谷寺像も仏像形式を採用した神像ということになるがするとその冠の形式も同様なものではないかと考えられる。髻の正面、正面左右、または円筒形に冠（飾り）を着けることは仏像では比較的多い。また長谷寺像の三山形の冠の形が蓮弁形と成ることも仏教の影響を思わせる。長谷寺像の頭飾は仏像形式としてよいのではなかろうか。

ついで足に目を向けると左足は膝を折り畳んで右足に重ねる足裏を見せるがその足は素足である。素足とするのはもちろん先の礼服の制（タビ—襪—を着け、二重底のクツ—舄—を履く）とは異なる。したがって足の表現も、仏像はほとんど素足に造られるので、仏像からの採用と考えられる。とすれば今の服制の問題とは離れるが半跏形とする坐法そのものも結跏趺坐形がそうなのであれば仏像形式に拠ったものとすることができよう。長谷寺像の半跏形の意味は別に考えてみるが、実際仏像では以前から少ないながらもその形式は見られまた後にも見られるが、神像では長谷寺像以前には見られず、これ以降も数は少ないと思われる（註15）。

このように服制からみると長谷寺像は礼服を身に着けながら頭飾、足元は服制とは異なり仏像の形式に拠っているとされると思われる。

#### V 形態の特徴について② 一手勢一

ついで手勢について。長谷寺像は左手は屈臂して前膊を膝上に置き、右手は屈臂して前に立てる。両手先欠失のため手の形、持物は不明である。

白山女神像は画像では白山権現を中心とする三所権現及び六所王子、諸眷属と白山開基の泰澄、二侍者を描く白山曼荼羅に描かれるが、その白山曼荼羅に関しては系統や諸神比定についての考察がすでに川口久雄（註16）、山本陽子（註17）、石田文一（註18）などの諸氏によりなされている。なにぶん垂迹曼荼羅の成立は鎌倉時代以降であり、白山曼荼羅の遺品も現状ではそのうち最も古い



図16



図17



図18

遊行寺本が「室町時代末期をくだらない」(註19)とされているものであるが、本像の手勢・持物に通ずるものがあるので参考としたい。

白山曼荼羅の女神像の手勢・持物について先の山本陽子氏及び石田文一氏に拠れば、まず白山曼荼羅はその系統によって越前平泉寺系、美濃長滝系、加賀系の三系統分けられ、越前系とされるものは、遊行寺本、醍醐寺本、石川県立歴史博物館本、平泉寺白山神社本、山岸家本、神光寺本などがあり作例も多く最も古い形とされる。その女神像の持物は団扇と宝珠(遊行寺本)、団扇と三日月(醍醐寺本、石川県立歴史博物館本、平泉寺白山神社本)であり、また美濃系は団扇と三弁宝珠、加賀系は団扇のみとするといわれる。そこで越前系の遊行寺本と石川歴博本をみても左手の持物の宝珠と三日月の違いはあるものの(宝珠のほうが古様とされる)手勢は同じとなっている。両者ともに坐して左手を屈臂して肩まで上げ掌を仰いで宝珠・三日月を載せ、右手も屈臂して肩の前で掌を内に向けて指を丸めて団扇を執る形とする(図16)。

この手勢について山本氏は、白山曼荼羅の女神像の右手に団扇、左手に宝珠という形自体が珍しいもので他の曼荼羅にはなくかつ神像彫刻にも少ないとされたうえで前述の京都・宇治市・白山神社・伊邪那美尊像(女神坐像)を取り上げその両手の形からこの像を白山曼荼羅の女神像の成立に先立つものとされた(註20)。京都・白山神社像は左手屈臂して前に出し膝上で掌を仰いで指を伸ばし(持物を持つか)、右手も屈臂して前に出すが左手よりは前膊を持ち上げており(図17)、確かに両手を「もた

げ」るのは、白山曼荼羅の女神像に通ずる意識かもしれない。ただ京都・白山神社像は右手先が欠失しているので持物(団扇)の有無は不明である。

このように京都・白山神社像は後の白山曼荼羅・女神像に繋がるとして、ついで長谷寺像と比較してみたい。長谷寺像の左手は現状では前膊部材と軀幹部材の接合がずれており本来はいまより上向きであったと思われ、京都・白山神社像と同様な角度であったと思われる。とすると掌も同様に仰いでいたのであろう。右手は京都・白山神社像が屈臂してそのまま前に出すのに対し長谷寺像は屈臂して肩の前まで上げる。手を肩まで持ち上げるのは白山曼荼羅・女神像と同じであり、その白山曼荼羅像は団扇を持っていた。とすると長谷寺像も団扇をもっていたと考えられるのであろうか。

団扇は丸い形をした扇で、小虫を打ち払いまた暑い時に風を送る用とするもので『和名抄』には「宇知波」とあり、『続日本紀』宝亀8年(777)5月癸酉条の渤海使節を送る際の贈品の中に「檳榔扇(檳榔の団扇)」があることから奈良時代には存在していたという。畳み扇(いわゆる扇)が外出用に用いられ後世、儀礼用の持ち物になっても「ウチワ」の方はもっぱら第宅内で用いられる実用品として愛好されたともいわれる(註21)。

また同じく丸い形をしているが柄が長いものに翳・指羽(さしば)がある。『万葉集』にも見えるもので、もとは貴人に日かざしや顔隠しのためにさしかけたものであるが後世、威儀化され宮中では即位・朝賀にときに用いられたという。威儀化されてからの翳は女官がさしかけるものであった(註22)。しかし基本的には日かざしであ



図19

るので通常時でも使用されていたようであり、すでに奈良時代以前の遺品として高松塚古墳壁画の女性群像の中の小型の髷をかざす女性像（西壁北側、東壁北側）が上げられている（註23）。しかしそれを見ると女性の服装は筒袖の衣で髪飾りもなく前述の朝服を着するようである。

さていまこのように白山曼荼羅・女神像の持物である団扇、髷についてみるとそのどちらも長谷寺像が持つと考えることは難しいのではなかろうか。団扇は公には持ち出さない装具であり、小型の髷は奈良時代では朝服時に持ち歩く装具と考えられるからである。天台寺門系の図像とされる『久原本図像』（註24）に見える、おそらくは白山権現であろう「白山妙力大菩薩」像は右手に団扇（柄が短く中に骨のようなもの書き込まれている）を持っているが（図18）、その理由は不明である（女神—女性—小髷との連想か、あるいは白山—雪—雲—風—団扇、それとも単純に山—風—団扇とでも繋がるのであろうか）。京都・白山神社像の制作時期も平安時代後期と思われ、『久原本図像』図同様にあるいは団扇を持っていたのかもしれないが（ただ、持物があるとすれば右手の高さを考えてみると柄の長いほうがよいのかも知れない）、とすれば左手も掌を伏せていたのであろうか（しかし左袖口の下側が彫られておりまた前膊の角度から手を伏せるのは難しいか）（註25）。

ともかくも長谷寺像の持物として団扇が適当でないとするれば持物は何であったのか。

平安時代前期の神像をみると笏以外の持物をとる例は少ないと思われ、ましてや女神像の場合は両手を露す例は珍しくかつ右手で持物を執る形とする例はさらに少ないと思われる。両手を露す例としては教王護国寺（東寺）・八幡三神像の女神像二軀、滋賀・守山市・小津神社・宇迦乃御魂命坐像、兵庫・櫛石窓神社・大宮比売命像などがあり、そのうち右手に持物を持つ可能性あるのは前者者であるがそれぞれ何であったかははっきりしない。と

すると長谷寺像もやはり不明とするしかないが、そもそも持物を持たない可能性もあるのではないか。長谷寺像は右手を肩まで上げておりそこで何かを執らないのであれば考えられるのは掌を前に向けて立てる形である（肩で掌を上にして何かを載せる形もありうるがその形の場合は左手が普通であろう）。そして左手は膝上で前述のように京都・白山神社像と同じであれば掌を上にもむける。このように考えると案外（指の形はともあれ）、右手・施無畏印、左手・与願印の形であったのではないかとも思うがどうであろうか。ここでは一応持物の可能性の低いことを指摘しておきたい。

## VI 形態の特徴について③ 一半跏形—

長谷寺像は左足を折りたたんで右大腿部に載せ、右足は踏みおろす半跏形とする。仏像では古くから見られる坐法であるが神像では少ない。したがってそれは仏像形式の採用と考えられるが、坐法としての半跏形の意味は仏像でも明確にされていないのではないかと思われる。ちなみに田中恵氏は重要文化財の中から半跏像をリストアップされているが（註26）、飛鳥時代後期の金銅仏をはじめ、奈良時代、平安時代、鎌倉時代の各時代の弥勒、観音、勢至、文殊、虚空蔵、地藏などの菩薩、不動明王および脇侍童子という密教尊、大黒天、閻魔天などの天、閻魔王などの十王、さらには大將軍八神社の武装神像などがあり、時代も像種も独尊、脇侍の形式も多彩であり、坐法の一つとする他はそこに全体として共通する意味合いを見いだすのは難しいように思われる。とすればその形式は例えば時代の流行、あるいは各像個々の理由など個別のケースによるものとして考えたほうが良いのではなかろうか。

長谷寺像の場合はまず同時代の仏像の影響を考えてみる必要がある。とすると平安時代前期の半跏像としては例えば石山寺の旧前立ち像といわれる如意輪観音半跏像（図19）や西大寺・如意輪観音半跏像が挙げられそれらの影響かとも思われる。周知のごとく東大寺大仏脇侍像が半跏像であったことが知られておりまた興福院の脇侍像もあり奈良時代の後期に半跏像の採用・流行があったとも思われ、それが石山寺旧本尊像に繋がるとも想像されるが（註27）、その流行は平安時代前期まで続いていたのかもしれない。あるいは奈良時代の半跏像が東大寺脇侍、興福院脇侍、それに額安寺・虚空蔵菩薩、北僧房・



図20

は何か意味があるのではなかろうか。というも時代は下る平安時代後期の例ではあるがすでに紹介されているように、和歌山・明王寺・白山権現本地仏の十一面観音像は半跏形とし同時代の本地仏、あるいは十一面観音像としては珍しい(註29)。半跏形の本地仏が珍しい分そこに特定の意味合いを想像させることも事実である。そこで白山神像が半跏形となることが可能かどうか検討してみたい。

白山開基とされる泰澄によって本地仏・十一面観音が感得された白山神の縁起は『泰澄和尚伝記』(註30)、『元亨釈書』巻18・白山明神(註31)などに記されるが、そのなかで白山の神は例えば『泰澄和尚伝記』に拠れば、泰澄の白山山頂における本地仏感得以前に夢に一度、現前に二度登場しており、その姿は「以天衣瓔珞、飭身貴女」、「貴女」とされている(『元亨釈書』ではそれぞれ「天女瓔珞嚴身」、「天女」とあり、これからすると『泰澄和尚伝記』の方が内容は同じであっても記述は正確といえようか)。ところがこの神の姿はそれ以降は現れず白山山頂(天嶺)での泰澄が感涙を流すハイライトシーンでも、そこではまず九頭竜王形が出現し、ついで十一面観音が現れたことで神の本地を知ったということだけになっている。では神(貴女)はどこで登場するかという

和尚於越知峰、見白山高嶺雪峰、常念攀登彼雪嶺、為末世衆生利益、可奉行顯靈神矣、和尚至靈龜二年夢、以天衣瓔珞飭身貴女、從虚空紫雲中、透出告曰、我靈感時至、早可來焉、と夢にでてきて言葉を発し、二度目は泰澄が「白山麓大

野隈笈川東伊野原」に着いた所で実際に登場して、

爰先日夢貴女屢々現命和尚言、此地大德悲母産穢、非結界、此東林泉、吾遊止地、早可來、言未畢、即隱矣、  
と、三度目はその林泉に行くのと、

前貴女現告曰、我雖有天嶺、恒遊此林中、  
以此処為中居、

と、これに続いて自分の素性を述べた後に再び、  
抑吾本地真身在天嶺、往而可礼、此言未訖、  
神女忽隱矣、

と述べて終る。これ以後白山神は登場しない。これらによれば白山神は泰澄を白山に招き寄せる役割のみを担っていると考えよう。さらに白山神の主張をみると初回は白山に「早可來」、次は林泉に「早可來」、三度目に「我雖有天嶺」、「抑吾本地真身在天嶺」、「往而可礼」といい、最後に自分の住所を打ち明ける。つまりこれによれば白山神は天嶺に居ることをいうことが重要といえるであろう。すなわち白山神の特徴は貴女の姿であること、白山山頂に居ることとなる。

さてそこでこのような白山神を造形化することを考えた場合どうなるであろうか。前者は問題は無いが後者、山岳神であることを示すとすればなにが考えられようか。それが例えば磐座に坐すことなどが挙げられるのではなかろうか。そこで磐座に坐す像に目を向けてみると前出の石山寺・観音像はその由来によれば石(磐)上に安置されたという(註32)、その坐法は半跏形であった(註33)。また同時代の西大寺・如意輪観音も磐座に坐る。またもとは山岳神とされる不動明王でも(註34)青蓮院・青不動のように磐座に結跏趺坐するもののほかに、明王院・赤不動や大阪・法楽寺・不動明王二童子像、新潟・法光院・不動明王二童子像のような磐座に半跏坐形とするものがある。また神像系では大將軍八神社の武装神像半跏像も磐座に坐するものがある。さらに仏像ではなくとも『石山寺縁起』巻二第六段の「尻掛け石」の由来を述べる場面では岩に坐する歴海上人は半跏形に描かれる(図20)。半跏坐は磐座に坐る坐法の一つとされていたのではなかろうか。ただし前出、『久原本図像』「白山妙力大菩薩」は半跏形とはしないがそれは恐らく磐座に直接坐するのではなく、磐座の上に三曲屏障付き框座を置きその上に坐すので半跏形とはしていないのであろう。つまり直接磐座に坐すよりは威儀を正す、あるいは格式化、權威化した表現なのであろうし(註35)、京都・宇治市・

白山神社像も同様な框座に坐していたものとも思われる。それは平安時代後期、中央における神仏習合の進展—権現・大権現号の付与など—と軌を一にするものであろう。

以上長谷寺像は磐座に坐することで山岳神であることを示すために半跏形としているのではなかろうか。

## 2. おわりに

本稿のまとめと若干の想像を述べて稿を終りしたい。

長谷寺・女神坐像は平安時代前期に遡る神像の佳品であり、同時代の神像遺品が少ない中また白山神最古の例として貴重なものと思われる。さらに白山神が天台系とされるので天台系の神像の遺品例としても捉えられるのではなかろうか。

形態をみると女性俗人の礼服装とするが冠、三道、足先など仏像表現と思われた。また手勢は両手先欠失のため明確ではないが、やはり仏像の手勢（施無畏・与願印）の可能性が考えられた。

坐法は半跏坐で神像としては珍しい形とするがそれは仏像の坐法の影響を受けたものと考えられると共に山岳神としての性格を表わすものとして磐座に坐す形としたのではないかとも思われた。

ところで最後にさらに神像と仏像について若干の想像を加えてみたい。すでに初期神像が仏像の影響を受けて成立し、具体的には仏像の形式を部分、部分に取り入れていることが指摘されている。ここまで見てきたように長谷寺像についても同様なことが言えいわゆる神仏習合像の例ということになるのであろうが、いま一度その形式を振り返ってみると、頭飾、三道、手勢、足先、坐法が仏像形式だとすれば、要は菩薩半跏像に俗装させたともいえるのではなかろうか。



図21

たとえば『久原本図像』石山御躰(図21)に礼服装させたようなものである。また前述したが長谷寺像の面貌表現(目鼻立

ち)は例えば奈良国立博物館・若王寺旧蔵・薬師如来像に通ずるようにも思われる。とすればそも神像のはじめはもちろんさまざまな形態はあろうが、仏像にそのまま俗装を着せたものも一形態としてあったのではないかとも思われる。そしてもしそれが認められるならば、その舞台はまさに仏教界の内部においてであったのであろう。

(了)

平成12年9月5日

### 註

- 1 像高54.0cm。髮際高45.0cm。頂一顎20.2cm。面長9.9cm。面奥14.9cm。髮張り13.6cm。面幅9.3cm。胸厚(左)15.5cm。腹厚20.5cm。肘張り30.6cm。坐奥26.8cm。膝張り43.0cm。実査 平成11年3月5日 牧野隆夫。長坂一郎。平成12年7月23日 長坂一郎。寺澤朋法。洞口寛。
- 2 襦袢衣は服制にはないが女性の作業着として用いられるもので女性の尊像にはしばしば着用されるものとされる。(『奈良6大寺大観・薬師寺』「吉祥天像」解説)
- 3 牧野隆夫氏のご教示による。ちなみに西川杏太郎氏による内削りの模式図を参考とすれば(至文堂日本の美術202『一木造と寄木造』)9世紀後半とされる福島・勝常寺・薬師如来坐像の内削り法に近いと思われる。
- 4 『佐渡名勝志』須田六右衛門富守編集、伊藤隆敬撰述、延享元年(1744)。(平成9年10月、新潟県立佐渡高等学校同窓会、野島出版)
- 5 『佐渡国誌』新潟県佐渡郡役所編、大正11年刊(昭和48年2月、名著出版)。引用書のうち「佐渡志」は文化13年(1816)、田中美清・西川明雅編纂。「子山佐渡志」は天明一寛政年間(1781-1800)、藤原子山編纂。「明細帳」は明治初年。「寺社帳」、「寺記歴代」は江戸時代か。
- 6 長谷寺御住職奥様談
- 7 浅香山木「古代の北陸道における韓神信仰」(『日本海文化』6号 昭和54年)
- 8 日本海文化叢書四『白山史料集』上巻(昭和54年3月、石川県図書館協会)
- 9 日本思想体系24『世阿弥 禅竹』(岩波書店)
- 10 佐渡国駅馬 松崎。三川。雑太。各五疋通充伝馬。(『延喜式』巻二十八兵部省)
- 11 山岸共「白山信仰の歴史(一)白山の比咩神の成立と発展」(『白峰村史』3巻 平成3年3月)
- 12 日本思想体系三『令』巻7「衣服令」(岩波書店)
- 13 関根真隆『奈良朝服飾の研究』第三章奈良朝の服制(昭和



- 49年3月 吉川弘文館)
- 14 原田淑人『唐代の服飾』第一編シナ唐代の服飾第四章唐代一般服飾・宝髻(昭和45年、東洋文庫)
- 15 日光市・輪王寺・男神半跏像・平安時代(栃木県立博物館『栃木の仏像』)同じく輪王寺・金銅女神半跏像・鎌倉時代など。
- 16 川口久雄「白山権現講式と白山曼荼羅」(『日本海域研究所報告』4号、昭和47年3月、金沢大学日本海域研究所)
- 17 山本陽子「白山垂迹曼荼羅考—遊行寺本を中心として—」(『仏教芸術』157号、1984年)
- 18 石田文一「白山垂迹曼荼羅に関する覚書—紹介と若干の考察—」(『石川県立歴史博物館紀要』2号、平成元年3月)
- 19 註17山本論文Ⅰ
- 20 註17山本論文Ⅲ
- 21 『有職故実大辞典』「うちわ」(鈴木敬三)
- 22 『有職故実大辞典』「さしば」(鈴木敬三)
- 23 註13関根著書第8章その他、団扇・指羽
- 24 『大正大藏経』図像4。図中に黄不動が含まれるので天台寺門系とされる。註17山本論文Ⅲ。
- 25 前述、12世紀の制作と考えられる福井、朝日町・八坂神社・十一面女神坐像は現状では拱手した袖上部に丸い小穴があり、団扇の柄を差した跡と思われるが、その小穴の角度は垂直ではなく、前方に向かって開けられており、又、その小穴の状態から後補のものだと判断した。さらに前述の如く、拱手して団扇を執るのは加賀系白山曼荼羅の女神とされることから、八坂神社像には団扇はふさわしくないとと思われる。
- 26 田中恵「神像彫刻に関する2.3の考察」註10(『岩手大学教育学部研究年報』4512、1986年2月)
- 27 井上一稔「奈良時代の「如意輪」観音信仰とその造像—石山寺像を中心に—」6(『美術研究』353、平成4年3月)
- 28 時代は下るが12世紀に地藏半跏像流行の影響を受けて僧形八幡像が半跏形となったと考えられる例がある。拙稿「山形県における僧形神像についての覚書」(『宗教美術研究』7、2000年3月)
- 29 むしゃのこうじ・みのる「有田山中の白山三所権現」(『地方仏Ⅱ』所収、法政大学、1997年)
- 30 註8書所収
- 31 『元亨釈書』には「越知山泰澄」と「白山明神」が別項で立てられており、「白山明神」は『泰澄和尚伝』のうち泰澄と白山神の接触、白山登攀、本地仏感得の場面だけが記されている。一方「越知山泰澄」はそれ以外の『泰澄和尚伝』、『法華験記』神融、『本朝神仙伝』泰澄を融合して記す。
- 32 『石山寺縁起』巻1第2段「天皇の御本尊を申し渡して、此山に草庵を構え、彼巖の上に本尊を安置し奉りて、」同第3段「秘法既に結願の後、本尊を納め奉らむとするに、石の上を離れ給はず。」(小松茂美編『日本絵巻大成』18石山寺縁起・詞書釈文、中央公論社)
- 33 註26井上論文一、姿と呼称の問題
- 34 渡辺照宏『不動明王』(朝日選書35、1994年)
- 35 註17山本論文には白山曼荼羅の三曲屏障と格狭間付台座が日吉山王曼荼羅や天台系法華三十番神に通ずるとの指摘がある。

[付 記]

本稿は東北芸術工科大学平成12年度特別研究「神仏習合像の形式の基礎的研究—半跏する白山神像について—」の成果の一部です。記して関係者には謝意を表します。